



サイアフ・ラウンジ ヒストリー

vol.01



黎明期
"SIAF カフェ"

2013 → 2014



サイアフ・ラウンジ あるあるとしてお客様から「この場所はいつからできたの?」「どうしてできたの?」と言われることがある。数年ぶりに訪れた方ならまだしも、資料館に何年も通う常連と思いきお客様からも「コーヒーが飲めること知らなかった」など、2015年の開設から5年がたった場所とは思えない認知度の低さに、スタッフ一同驚きを隠せない。いや、驚いている場合ではない! もっと知ってもらわなければならない! これはチャンスだ!



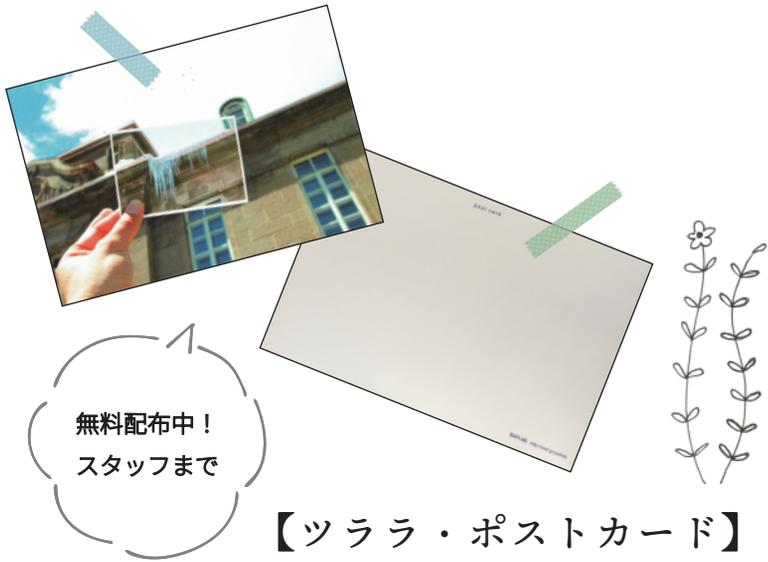
SIAF ラウンジの誕生について知るには、第一回目の札幌国際芸術祭(以下SIAF)が開催される前、その準備期間である2013年に遡ってみよう! ゲストディレクターに就任した坂本龍一さんが、札幌市内の歴史的建造物を視察していた際、札幌市資料館に訪れ呟いた「この場所に芸術祭に訪れた人たちが集うカフェと、大人のバー空間が作れたらいいね!」この一言で資料館でのスペースづくりのプロジェクトが動くことになった。当然この事実を知っている人は少ないだろう。(それからは私がプロジェクトマネージャーとして担当することになった)ただ、飲食店を

開設するための設備もノウハウも持たない当時のSIAF事務局は、ディレクターからの無茶振り(?)に因應るべく、まずは地元札幌でカフェを営む事業者との提携を画策。紆余曲折を経て快く応えてくださったのが宮田屋珈琲さんであった。札幌市役所や中央図書館に「元気カフェ」を出店している宮田屋珈琲さんの協力を得られることで、SIAFが主催するカフェとしてのクオリティは約束されたのだ。(ちなみに、宮田屋珈琲さんには現在のSIAF ラウンジでもお世話になっています!)

しかし同じく重要なのは、どのような空間に設えるのである。第一回目の芸術祭のテーマ「都市と自然」に根ざした空間デザインが必要とされた。時間も予算も限られている中で、この難題に答えられるような人物は存在するのだろうか・・・建築家やデザイナーなどから候補を検討していく中で、一人の男の名前が挙がる。石川大峰さんその人である。

石川さんは、グラフィックデザイン、空間デザイン、音楽ライブの企画など、多分野で活躍するクリエイター。泣きつくように相談したところ、これまた快く引き受けてくれた。石川さんの空間イメージは、北海道産の素材にこだわり、「都市と自然」を五感で堪能するというものであった。今では懐かしいりんご箱を積み上げたカウンターや壁、森を感じさせる家具やガラス細工、そしてライティング、白樺の間伐材で作ったスピーカーなど、随所にそのこだわりを見せ、多彩なアイデアと技術で、想像を超えるファンタスティックな空間を生み出してくれた。

こうして、札幌の歴史を物語る札幌市資料館で「時代を感じて今の札幌人が語り合う場」が、期間限定のカフェとともに、SIAF2014の開催と合わせ営業をスタートする。そして、2015年から正式に始まっていく、現在のSIAF ラウンジへと繋がるのだ。文:SIAF2020事務局マネージャー 漆崇博



無料配布中！
スタッフまで

【ツララ・ポストカード】

SIAF ラウンジ窓際の席に、こっそり置いてあるポストカード。夏と冬で全く違った表情を見せる資料館の様子を表しています。冬になると姿を見せる大きなツララは寒冷地である北海道ならではの風景。雪氷害の一つでもあります。子供の頃にこれと遊んでいた人も多いのではないのでしょうか？ポストカードはスタッフにお声がけくだされば、無料で差し上げています。札幌市資料館に訪れた際の記念として、一枚いかがでしょうか？

SIAF ラウンジとわたし。



「建ものがよいと、仕事が長くつづく」。そういっていたのは、日本を代表する思想家、吉本隆明氏だった。朝起きたとき「今日も、あの建ものに行ける」とおもるのが秘訣らしい。

SIAF ラウンジのある札幌市資料館は、大正 15 年に高等裁判所として建てられた。館内にはなつかしいステンドグラスの窓、なめらかな曲線を描く階段、鈍い光を放つ丸いドアノブなど、至るところに意匠がある。なにより室内にいながら、咲きほころばるバラ園や大通公園に降りつもる雪を愛でることができる。SIAF ラウンジのスタッフとなり、すこやかにほたるく日々があつという間に過ぎた。「今日も、あの建ものに行ける」。その言葉の意味が、はたらく私の心をささえている。

文：SIAF ラウンジスタッフ K

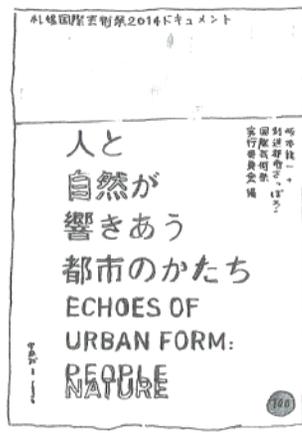


ラウンジの
ほんだな

— 第1回テーマ —
『都市と自然』



「Switch 別冊 札幌国際芸術祭 2014 OFFICIAL GUIDEBOOK」 / スイッチ・パブリッシング



「人と自然が響きあう都市のかたち 札幌国際芸術祭 2014 ドキュメント」 / 平凡社



「都市革命 公有から共有へ」 / 中央公論新社

このコーナーでは、SIAF ラウンジの本棚に並んでいる「たくさんの本たち」が、どんな経緯でここにあるのかをご紹介します。現在ある約 700 冊もの蔵書は、その半数以上が 2015 年の SIAF ラウンジ開設当初からあります。2014 年、札幌で初めての国際芸術祭 (SIAF2014) 開催のための参考資料として揃えられ、SIAF2014 終了後、これらの本をただただ眠らせておくのはもったいないと、SIAF ラウンジに配架されることになりました。こうした開設当時からある本は、本の上部に「創造都市さっぽろ・国際芸術祭実行委員会」という印が押されていますよ。今回はその中でも、SIAF ラウンジが生まれたきっかけでもある「札幌国際芸術祭 2014」の公式ガイドブックとドキュメントブックをご紹介します。ガイドブックは、ゲストディレクター坂本龍一氏の構想と参加アーティストのインタビューを中心に。そしてドキュメントブックは臨場感のある丁寧な作りで、実際に作品をご覧になった方もそうでない方も、とてもワクワクしてきます。もうひとつ取り上げたいのは黒川紀章氏の「都市革命」。一見おカタそうなハードカバーですが、内容は読みやすくとにかく著者の「都市計画」の知見がスゴい。もしかしたら坂本氏は、札幌という都市のこれからについて、この本からヒントを得たのかもしれない。

Cafe の
ちょっと
いい話？

地獄のように漆黒で、苦味がつよくて、ちがいのわかる男の人が飲んでいる・・・そんなイメージがうすらぎ、フルーティで個性ゆたかな味わいが定番となっていますね・・・コーヒーのお話です。

人気の品種や名称を調べてみると・・・エアリー、ゲイシャ、ペラドノヴァン・・・なんだかとてもおしゃれです。

SIAF ラウンジの「オリジナルブレンドコーヒー」は、宮田屋珈琲さんのご協力のもと生まれた、ここだけの味わい。苦味がなく、だからといってフルーティー、でもないのだけれど、そのまん中あたりをのんびり進んでいくような、やさしい甘さと軽やかさです。

サイアフ・ラウンジ
オリジナルブレンド



なんだか落ちつく、
ほんのりとした甘さです。